

28 和氣広虫について

半井英江

一九九九年は和氣広虫・清麻呂姉弟没後一二〇〇年であった。

東京では、皇居竹橋のお濠端に面して和氣清麻呂の巨大な銅像(昭和十五年、皇紀二六〇〇年建立)が、二重橋の方角を見つめて立っている。

京都では、高雄山神護寺境内の護法社に、清麻呂は古くから祀られていたが、嘉永四年に孝明天皇は正一位護王明神の神階神号を授けて、それを護王社とされた。ペリー来航二年前であり、尊皇攘夷派の志気昂揚のためだったのではないだろうか。

明治七年護王社を護王神社と改称して別格官幣社に列せられ、同八年半井真澄が護王神社初代宮司に任せられたのである。同九年に和氣広虫、藤原百川、路豊永合祀が許可されたが、新社殿を京都市上京区烏丸通桜鶴町町

華族中院家の邸地に造営する事となり、神護寺より現在地に遷座された時に配祀された。

和氣広虫が子育明神として祀られ、正式に護王神社の主神が二柱(姉弟)となったのは大正天皇の勅旨(大正四年)によるのだが、その背景にひそむ事情に関心を寄せている。

初めて「広虫」の名を聞いて関心を持ったのは昭和五十六年であった。四月四日護王大祭の日に「弘文院」に入学したのだが、当時酒井利行宮司が、古事記、萬葉集について講義されていた。酒井宮司から、「万国赤十字社に寄贈された和氣広虫のブロンズ像」の事を聞き知ったからであった。いつ、だれが、どんな理由で世界赤十字社に贈ったのか。この二十年間、気にかゝっている。

その広虫像はナイチンゲール像、フレレーベルの像と共に応接間に置かれていたが、戦後、ユネスコかユニセフに移されたらしいと云う話である。

半井真澄に関係があるかも知れない。初代宮司としては明治一三年十月十五日依願免とあるが、第七代宮司として昭和四十年三月六日被仰付、大正六年四月一五日死

亡とある。

大正四年『和氣姉弟大和錦』半井真澄著を刊行したのが、九月十五日であり、同年十一月十日に大正天皇の勅旨により、和氣広虫姫命を護王神社に正式に合祀し、清麻呂公命と御祭神二柱となる（護王神社略年表、護王神社御遷座百年記念・和氣公と護王神社・昭和六十二年十一月三日発行）。

なお、右の略年表より重要事項を付す。

明治37年5月26日、日露宣戦奉告祭を執行する。

38年12月23日、日露戦役平和克服祭を執行する。

43年11月11日、『和氣公御伝記二葉の楓』（半井真澄

著）を刊行する。

大正3年9月17日、日独宣戦奉告祭を行ふ。

4年9月15日、『和氣姉弟大和錦』を刊行。

4年11月10日、和氣広虫姫命を正式に合祀。

4年11月14日、大嘗祭奉幣を執行する。

9年8月2日、日独戦役平和克服祭を行ふ。

14年5月18日、皇太子殿下が行啓され御参拝。

14年7月3日、皇后陛下が「神ながらの道」。

15年3月22日、澄宮崇仁親王殿下が御参拝。

昭和3年11月14日、大嘗祭奉幣を執行する。

3年、和氣姉弟二葉の綿・半井鉄道著」

6年、和氣家歴代系図を半井鉄道が奉納。

8年11月28日、皇后陛下御安産祈願祭を行ふ。

10年、高雄山の元護王神社の跡地が和氣公靈廟として復興される。

和氣広虫のブロンズの像が世界赤十字社に贈られた時期について、杉田暉道・長門谷洋治・平尾真智子・石原明著・系統看護学講座別巻9「看護史」を参考にしながら、私なりの考察を試みさせて戴きたい。

一、明治のはじめに赤十字活動はわが国に知られていた。半井真澄の父梧庵は、今治藩で嘉永二年に種痘を実施した医者で、明治十五年に上京して明治二十二年に永眠した。父子で博愛社を応援し、明治十九年に日本がジュネーブ条約に加盟するのに関係したと考えられる。

二、日本赤十字社篤志看護婦人会結成の頃。三、和氣広虫が正式に合祀された時で大正皇后が希望されたのかも知れない。